「幻影の人」西脇順三郎のギリシア語漢語比較

工藤　進　著
生田康夫　訳

一　ギリシア語漢語比較に没頭した詩人

天気
（覆された宝石）のやうな朝
何人か戸口にて誰かとさゝやく
それは神の生誕の日。

一九三三年、三年間のオックスフォード滞在を終え英国から帰国して八年後、三九才の西脇順三郎はこの謎めいた三行の短詩によって日本の詩世界に革命をもたらした。この詩はローマの農業祭事より名をとった詩集『*Ambarvalia*』のLE MONDE ANCIEN（フランス語！）の部にあり、その中の「ギリシア的抒情詩」と題された十篇余の詩群の最初に掲げられている。

西脇は地方銀行家の息子として生活に不自由はなかったものの、若くして父親と姉と弟を亡くしている。彼は英国からの帰国後慶応義塾大学の教授となった。古今の外国語に精通していた彼はラテン語で学士論文を草しており、ルコント・ド・リイルのような貴族の風格を備えていた。西脇が生まれたのは一八九四年、その高踏派詩人の没年である。

彼の先輩詩人萩原朔太郎に対する尊崇の念は深く、英国行き

の長い船旅に携えた二冊の本のうちの一冊は改訂されたばかりの萩原の詩集『月に吠ゆ』であった。ちなみにもう一冊はニーチェの『ツァラツストラかく語りき』。この辺の事情は主に新倉俊一著『西脇順三郎』（講談社、一九九五年）の年譜に負うている。

帝国主義戦争が中国で泥沼化しはじめて以降、西脇は詩作から遠ざかった。この歴史の暗い時代に西脇は古典研究にいそしんだ。その古典研究が、遥か後になって具体化することになる漢語ギリシア語語彙比較研究へのとてつもない志向を吹き込んだのだった。西脇はモダニズムやシュールレアリズム運動の先導者であったが、それらに対する彼の沈黙は彼を投獄から守る結果となった。彼の信奉者の中には迫害を蒙ったものもいる。

戦後、詩法の大転換にもかかわらず、彼を待ち受けていたのは名声と評価だった。大転換というのは、内面の感情の吐露をストイックなまでに抑制していた彼がそれに寛容になったということである。

言語学の用語で言えば、以前の彼は、詩の中であらゆるシニフィエへの顧慮を排したシニフィアンの詩人であった。彼の詩は意味を拒否し、人がそこに意味付けすることを拒絶していた。言葉を色に変え、われわれに言葉で描かれた超現実のイメージを見せる。かつて上京したのは画家になるためではなかったか。今や彼の詩は無難で、共感され易く、理解し易いものにさえなった。人生の喜びと悲しみが彼には親しいものとなっていた。彼の中で、シュールレアリストから賢者への転換がなされたのである。

六八才の時慶応義塾大学を退官し、自宅近くの別の大学で教えることになった。それが明治学院大学である。そこで『詩経』（ブログ十九号参照）の輪読会を発足させ、同時に漢語とギリシア語の比較に本格的に取り組みはじめた。彼は比較言語学者詩人であった。この仕事――古典語にあまり詳しくない弟子にはほとんど理解できない仕事――に注がれた情熱はいったいどこからきたのだろうか。

彼は漢字とギリシア語で埋め尽くされた膨大な草稿を残している。西脇米寿の祝いに際し弟子たちは赤く美しい装丁本を贈った。それは草稿の一部の写真版だった。手書きの文字の機械的活字への変換は実行困難だとわかったからであり、また風合いを損ねる恐れがあったからである。その他の草稿は製本され十数冊の冊子となった。

二　言葉の発掘者

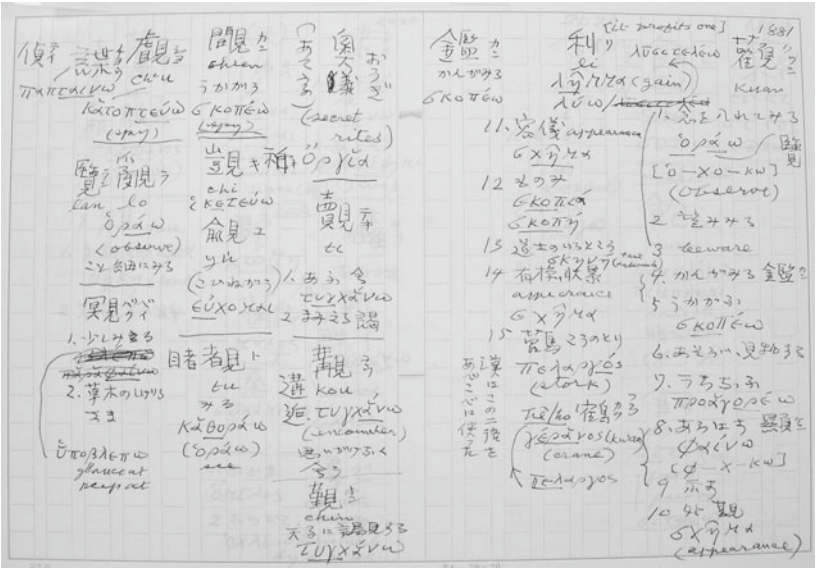
詩人西脇はわれわれの言語学研究所に、東西語彙の「比較探究」にかかわる数千枚の草稿（漢字とギリシア語で埋められた七千五百枚以上の草稿）の入った数個の木綿袋を残した。この遺贈品をどう扱ってよいか誰もわからなかった。というのもその価値は学問的というより詩的なものであるように見えたからだ。われわれの仲間にそれに対峙するに十分な漢学・ギリシア学の素養を備えたものはいなかったのである。

そんな時、研究所にホメーロス輪読会が発足し、それが彼の原稿を評価することを可能にすることとなる（ブログ十五号参照）。この輪読会は詩人没年の翌年一九八三年の年度初めに設置された。旗振りは国文学の満田郁夫教授だった。毎週の会合（火曜朝、その後水曜朝）は一般に門戸が開放された。参加者は十人を超えていた。先ず『イーリアス』に取り組み、一回五行、そしてすぐ十五行になり、このペースは数年続いた。一九九八年にはジャン・ピエール・ルヴェ氏がわれわれに講義のためフランスから来日してくれた。二〇〇九年に読み終える頃には毎回四十～五十行のペースとなっていた。

当初私は十五行の準備をするのに三日必要であったが、今は四十五行のために二時間で充分である。『イーリアス』と『オデュッセイア』を終えるのに二十七年かけた結果、私は師西脇の美しい漢字とギリシア文字に戸惑いなしに向き合うことが出来ると感じ始めている。彼が原稿を残したのはこうしてわれわれに勉強させるためだったのかもしれぬ！

私の研究室には草稿の一部の入った白い木綿袋があった。言語文化研究所へのこの袋の運び込みは先の冊子製本後のことであった（本稿一参照）。したがってこれらの草稿は分類されぬままに残っていたものだ。私はそれを時々思い出した。私はそれらの草稿が埃にまみれ、注目されることなく、見出しもページも振られることなく放っておかれていることを知っていた。

私のブログ（二〇一〇年二月に始まり現在四十八号に至っている）の進行につれ、私は研究所の棚にうずもれている草稿の呟きを時々耳にするような気がしてきた。そこでそれを取り出し、番号を振り、すべてをデジタル化する決心をした。三日間の酷暑の中の作業であったが研究所の新メンバー、生田康夫講師のありがたい協力もあり、つい先日（七月二十一日）作業は終了した。現在コンピューターに取り込まれた原稿はいずれ一般に公開される予定である。それは一二七〇枚。姿形の異なるものではあるが、他の既に製本された七千枚強（含むノート類）に当然加えられるべきものである。詩人西脇は、彼の詩の源泉の解明に資する可能性を秘めた合計八千枚を超える草稿を残していることになる。



西脇草稿 345 枚目

彼の方法は、発音の知られたいくつかの漢字を選ぶことにある。彼は決して意味から出発しない、音から出発する。彼の「探究」のいくつかを挙げてみたい。

三四五枚目（一二七〇枚中）では旧漢字「觀 kuan」（見る）を取り上げ、この漢語 kuan と様々なギリシア語との間の音声上の類似性を説明しようとしている。その様々なギリシア語というのはすなわち ὁράω（念を入れて見る）、σκοπέω（うかがう）、προ-αγορεύω（うらなう）、φαίνω（あらわす）、σχῆμα（外観）、σκοπιά（物見）、σκοπή（物見）、σκηνή（道士の居所）などであり、必要に応じ有意な類似部分に下線を付している。その説明に納得するか否か、私としては「読者のご随意に」と言うにとどめよう。

「觀 kuan」（見る）にかかわる意味の連想の記述の最後に、彼は同音語「鸛 kuan」（コウノトリ）とギリシア語 πελαργός を挙げている。更にこの鳥の名前が彼に他の鳥の名 γέρανος（鶴＝漢音 hok, hak, kak）を想起させ、比較言語学者詩人はそこに「漢はこの二語をあべこべに使った」と付記している。

混同が存在したのは「鶴」と「鵠 hok, kok」の間であり、「鶴」と「鸛」の間ではない（ブログ四六号及び『廣漢和辭典』大修館、一九八二年、下巻一三六二頁）。しかし彼の誤りは問題ではない。私を魅了するのは彼の喚起能力であり古今を通じた語彙連想力

である。

三　古代イメージ創造の芸術

コップの原始性
ダフネの花が咲き
光る河岸を
林檎とサーベルをもった天使のわきを過ぎ
金髪の少年が走る
アカハラといふ魚を
その乳光の目の上を
指の間でしつかりつかみながら
黄金の夢は曲がる

西脇のこの詩（『*Ambarvalia*』）は「コップの原始性」と題されている。この小編が実際意味するところが何であるにせよ、この詩は私に大壺か、もしくは地中海のどこかで、例えば考古学の発掘の際発見された陶器を想起させずにはおかない。詩は陶器に描かれた生彩に富むエキゾティックな場面をなぞっているかのようだ。

イメージは色彩の語彙で表現されている。ダフネ（白もしくは淡い紫）、林檎（赤もしくは黄）、「金」髪の少年、「アカ」ハラという魚、「乳光」の目、そして最後に「黄金」の夢。八行に六つの色がある。ほとんど各行に一色の語。この詩の地中海的明晰さと透明性に誰が驚嘆せずにおられよう。その明晰と透明は、日本人が国外に出ることなく閉塞し、日本が暗い先の見えない領域に進んでいた当時、大多数の日本人読者には見知らぬ国のものだったのだ。大きな反響を呼んだこの詩集の出版は一九三三年のことだった。

彼の詩は謎の作品ではない。読者は言葉によって作り出されるイメージに敏感でありさえすればよい。ダフネ、天使、サーベル、金髪（そして「黄金」の夢）、いずれも出典は日本のものではない、読者は既に西洋の風景の前にいる。

この詩には三つの片仮名（その語源的概念を欠いた音節表記法は外国語・外国由来の語を表記するのにふさわしい）が使われている。ダフネ、サーベル、アカハラ。ダフネのかわりに沈丁花、サーベルのかわりに刀や剣、詩人がこれら日本語での対応語をあえて使わなかったのは、情景を西洋化したかったからだろうか。おそらくそうだろう。

サーベル（の語）は西洋から輸入された行政機関である警察の警察官によって保持される権力の象徴である。ダフネが皆の知っている灌木であると理解するには知識のみならず教養がなく

てはならない。詩集『*Ambarvalia*』の享受は日本的教養ではなくヨーロッパ的教養にかかっている。片仮名の語はダフネ、天使、金髪等と相俟って日本人読者に快い異郷感覚を与えるのである。

詩人は何故「アカハラ」を片仮名で表示したのだろうか。「アカハラ」という語は勿論西洋語ではなく日本の方言である。それは山椒魚に近い両棲類イモリか（必ずしも腹が赤くはないが）淡水魚ウグイに該当するだろう。日本のどちらかと言えば北方の出身である詩人はこの語に故郷の「アカハラ」を思い浮かべたのではなかろうか。

この語の正確な意味は、その出典と同様、全く私の関心事ではない。これは例えて言えば、ある美しいフラン人女性の口から“lo beth cèu de Pau”（ポーの美しい空）というガスコーニュ方言が出てくるのを聞くようなものだ。大都会（この場合は東京）で普通使われない言葉を使うことは、田舎臭さやスノビズムに陥る危険を孕みつつも、無味乾燥な現実からわれわれを遠ざけてくれる。これらの三つの片仮名は読者に仮想の旅をさせる効果を持っていたのである。

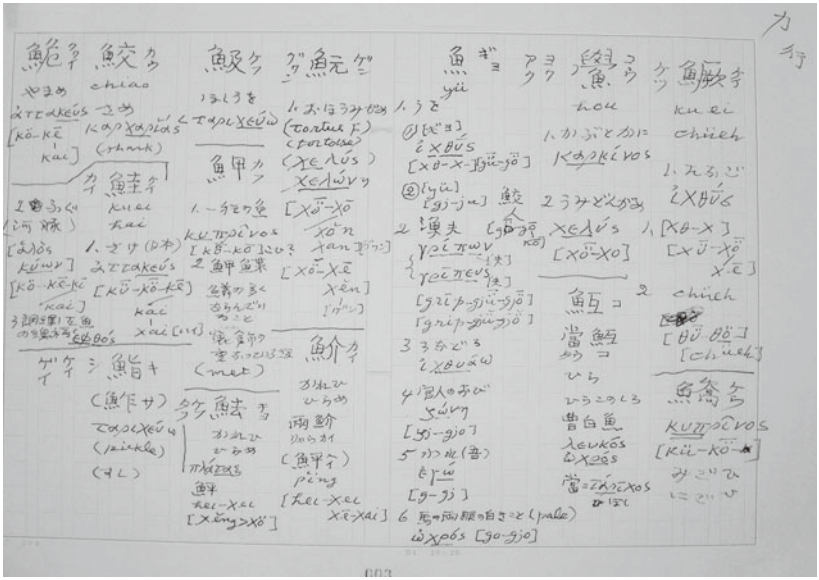
四　「コップの原始性」再読
――西脇の古代世界を可視化する

アカハラといふ魚を
その乳光の目の上を

象形文字の国において、語の視覚イメージは音声イメージと同じほど読者を夢想させる。私は西脇の詩「コップの原始性」（詩集『*Ambarvalia*』）第六行目に使われた「乳光 nyu:ko:」という表現を“blanc lacté（乳のような白）”と訳した。

実際、分解すると「乳」と「光」であり、「乳光」という表現の意味は漢字を知る者にとっては何の曖昧さもない。しかしどの辞書にも「乳光」という熟語は採録されていない。これは詩人によって作られた新語である。詩人は画家が使いそうなこの形容・修飾語をどこから持ち来たったのだろうか。

われわれの研究所に詩人が託した原稿の中で、西脇は九四一枚目（一二七〇枚中）の一部をyüと発音表記された「魚」に充てている。この比較言語学者詩人はなんらの語源学的意図なしにこの漢語をギリシア語ἰχθύς「魚」／ἰχθύάω「釣る」と比較し、-χθύ-の部分にアンダーラインを引いている。その部分は、シャントレーヌを始め他の比較言語学者たち（メイエ、エルヌー、ポコルニー、ビークス）によれば、印欧語の「魚」を意味



西脇草稿 941 枚目

する語の語源を説明する際の、正に鍵となる要素であった（ブログ十一号参照）。われわれの詩人の直感は正鵠を射ていたといわねばならない。

「魚」の古代中国における発音は yü（又は gü）ではなく、藤堂博士の辞書（『漢和大字典』学習研究社、一九七八年）によれば ngiag（上古）/ ngio（中古）である。魚は呉音では go、漢音では gyo と発音され、現代北京語では ü、もしくは yü である。西脇順三郎は「魚」の漢字に与えた yü（又は gü）の要素に対し、語源がいまだ不明の γρίπων / γριπεύς「釣人」、ἐγώ「私」（ブログ七号参照）や ζώνη「（唐王朝時代の役人が身に着けていた魚の形状をした）帯」を挙げた後、熟語「魚目」によって表されている漢字「魚」の特異な意味の前で立ち止まっている。「魚目」は名馬＝「白目」のこと指す（藤堂『漢和大字典』学習研究社、一九七八年、一五二四頁）。

金髪の少年の手につかまれた魚の目に使われた「乳光」の表現が白目の馬と関連があるのか否か私にはわからないが、草稿は詩人の語彙連想がそこまで至っていたことを示している。一方で詩人は、ギリシア語 ὠχρός（黄色、蒼白い色）を gü「魚」と対比してもいる。

「乳光 nju:ko:」には同音の語として「乳香」がある。nju:ko: の音は必然的に、そして特に後者の語を喚起する。先に示した

「蒼白い」という意味を思わせるのは漢字「乳光」の視覚イメージである。詩人は乳香の同音語によって、ベツレヘムでのキリストの誕生の日東方三博士がもたらしたとされる三つの贈り物「金、乳香、没薬」をわれわれに想像させようとしたのだろうか。

詩人西脇はエミール・マールやジョン・ラスキン、その他の美術史家達を読んでいなかったにせよ、ἰχθύς「魚」が神の祝福を受けた（Χριστός）イエスの略号であるとする西洋図像学固有の見方に通じていたことは想像に難くない。そこに私は、詩集『*Ambarvalia*』の中の「天気」ともう一つ「コップの原始性」、この二つの詩をつなぐものがかすかに浮かび上がるを感じる。それはすなわち、古代ギリシア・ラテンの宗教的感情である。

五　西脇順三郎のテキストにおける滑稽
――文脈の廃絶、意味の追放

西脇順三郎の詩集『*Ambarvalia*』は二極構造をなしている。一方は LE MONDE ANCIEN と題され、他方は LE MONDE MODERNE と題されている。前者の世界は三行の小詩「天気」（本稿一参照）の「覆された宝石」の輝きによって導入される。後者は三六行よりなる散文詩「馥郁タル火夫」の滑稽によって描かれている。その冒頭三行は次の通りである。

ダビデの職分と彼の宝石とはアドーニスと莢豆との間を通り無限の消滅に急ぐ。故に一般に東方より来りし博士達に倚りかゝりて如何に滑らかなる没食子が戯れるかを見よ！

詩人によって意図された文学的滑稽は、基本的には意味の上での文体の異常さが文法的規則に違反しないところで成立している。こうした理解の不可能性は笑いを引き起こさずにはおかない。西脇のナンセンスの技法は時として（この詩の場合のように）乱暴であり、時として（「天気」の場合のように）高貴である。この乱暴と高貴さは戦争の野蛮に向けた準備がなされていた時代に歓迎されたのだった。

この散文詩の特徴であるナンセンスは象徴性の欠如の結果である。彼の詩は象徴であることを望んでいない。彼の詩になんらかの象徴的な、倫理的な、道徳的な、更には教訓的なものを求める人は失望するだろう。

ダビデ王や青年アドーニスそして博士たちの名はこの詩の中で伝説的、神話的意味を持っていない。それらは「宝石」や「莢豆」や「没食子」に並べ置かれたかぎりにおいてのみ初めて意味を持つ。寛大な読者を笑いに誘うのは、ダビデ／宝石、アドーニス／莢豆、博士たち／没食子の組み合わせという、かくも

似つかわしくない要素の並置だ。この並置は要素間に新奇であると同時に思いがけない関係を作り出すのである。

西脇の多くの詩（特に詩集『*Ambarvalia*』の詩）は、鍵谷幸信（『詩人西脇順三郎』筑摩書房、一九八三年）によれば植物や動物のデッサンの本、あるいは、西脇の引用についての優れた書（新倉俊一『西脇順三郎全詩引喩集成』筑摩書房、一九八二年）によれば、しばしば古今の詩人のある語や一節に想を得ている。

新倉教授の引喩集成によれば「コップの原始性」（本稿三）はボッティチェルリの寓意画に想を得たものである。「天気」は西脇が讃嘆してやまなかったジョン・キーツ（一七九五～一八二一）の一節に想を得ている。しかしながら彼の発想のもとについて長々と注釈するのは無用のことに思える。というのも、彼の詩の興味の焦点は主として、言葉が想像界において極端に対立するものの間に思いがけない関係をうち立てるのを見ることにあるからである。今日ではこの手法は詩の世界のみならずメディア界でも常套となっており、語呂合わせやことばあそび、ダジャレにさえ堕しかねない。彼の詩について、博識に基づく解釈の試みは空論に陥る危険をはらんでいる。

大学生活から引退した詩人西脇の漢語ギリシア語の語彙比較は学問的方法とは対照をなしている。その比較は科学的解釈や博捜によってなされているのでは全くない。われわれはそれが新たな詩的創造であることに気付くのである。

六　ことば λόγος、はなし λόγος、論語 διάλογος
――詩人西脇の二言語詩

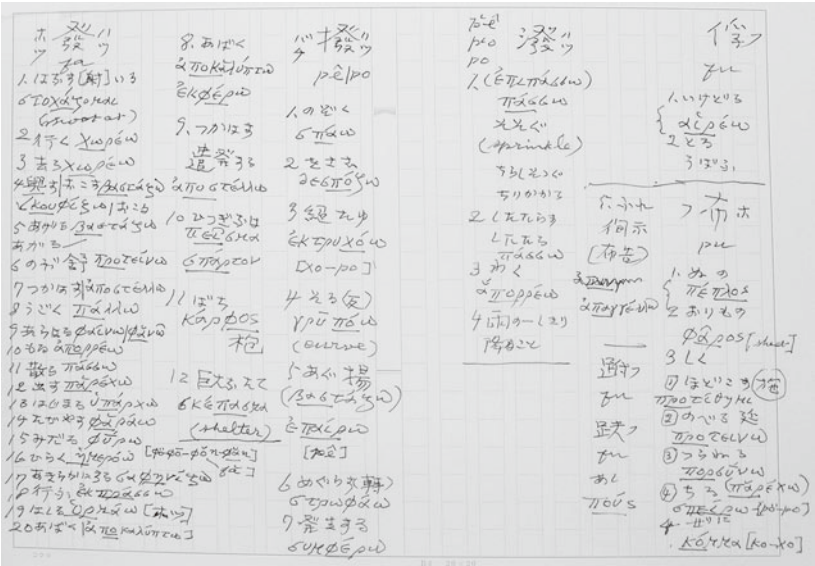
先に本稿二において、西脇の漢語ギリシア語比較の方法の例を紹介した。彼の熱意のほどを知るためにさらにもう二例ほど取り上げてみたい。

五〇一枚目。彼は旧字「發」（現行簡体字「発」。北方の発音で hatsu、南方では hotsu）から始める。藤堂辞典（詩人の最晩年に出版され、詩人は手にすることができなかった。幸いなことに！）はそれに四つの発音（上古 piuăt、中古 piuʌt、中世 fa、近世 fa, fà）を付し、次の八つの語義を与えている。

一　はなつ、ぱっと離す　二　出発する、出発させる　三　おこる、おこす　四　ひらく、花などがぱっとひらく　五　ひらく、外に向かって広がる　六　あばく、土を掘りおこす　七　文書や命令を外に出して知らせる　八　つかわす

西脇はといえば、「發」という漢字の意味を二十の語義に細分し、それぞれの語義に関連するギリシア語を対応させている。

一　射る　στοχάζομαι



西脇草稿 501 枚目

二　行く　χωρέω
三　去る　χωρέω
四　興す、おこす　βαστάζω、おこる　κουφίζω
五　あげる、あがる　βαστάζω
六　のぶ、舒ぶ　προτείνω
七　つかわす　ἀποστέλλω
八　うごく　πάλλω
九　あらはる　φαίνω, φάνω
一〇　もる　ἀπορρέω
一一　散る　πάσσω
一二　出す　παρέχω
一三　はじまる　ὑπάρχω
一四　たがやす　φαράω [＝φυράω?]
一五　みだる　φύρω
一六　ひらく　ἡμερόω
一七　あきらかにする　σαφηνίζω
一八　行う　ἐκπράσσω
一九　はしる　ὁρμάω
二〇　あばく　ἀποκαλύπτω

詩人はいたるところで、漢語 hatsu あるいは hotsu（の断片）がギリシア語に反映されていることを見とどけようとしているようだ。彼は h の音が一定の条件のもとで p や b や k に変わ

りうることをはっきりと意識している。彼にこれほど多くのギリシア語を思い起こさせたのは印欧語言語学に対する無知故ではないのである。

象形文字体系の完成は、前七世紀ごろとされる中国最古の詩集『詩経』の編纂と密接に結びついている（ブログ二〇号参照）。典礼的古歌集『詩経』の読解は、その心であり手段でもある象形文字の読解に依存している。この中国の最初の典礼的作品の解釈は先行作品という比較対象の欠如のため大きく変動してきた。

中国の古典語辞書はすべて『詩経』に基礎を置いていた。しかし『詩経』で初めて用いられた象形文字は、それらが本質的に視覚的聴覚的イメージ（形と音）にすぎないため、何らかの具体物と関係付けることができなかったのだ。アルファベットの表記はこれと性質を異にしている。ホメーロスの作品は現実に使用されている言語との連続の上にある。ホメーロス作品の表記は実在する言語システムを反映しているのである。

周知のとおりこの学者詩人は大戦開始を前にして詩作から遠ざかり、西洋古典語の研究に打ち込んだ。その博士号を取得した研究の遥か後、ふたたび偉大な中国古典の新たな研究に取り組むこととなった。西洋古典によく通じ、かつ画家でもあった西脇（両者を兼ね備えることは稀有のことだ）、その彼が『詩経』のシニフィアンに他の日本の学者たちとは異なったシニフィエを見たことは驚くには当たらない。

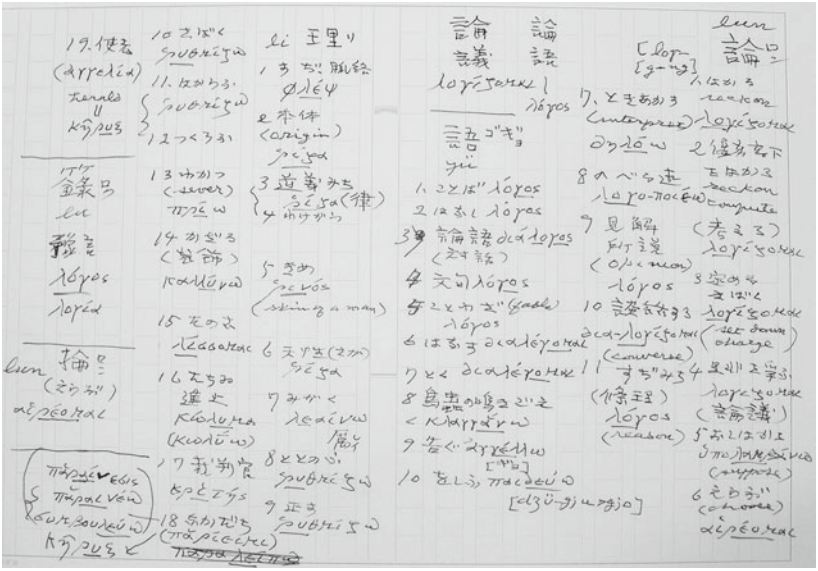
五四〇枚目は「語 go、gyo」についてだが、これはまさしく二言語詩である。韻を踏んでいる！

ことば λόγος　はなし λόγος　論語 διάλογος
文句 λόγος ことわざ λόγος　はなす διαλέγομαι

一　ことば　λόγος
二　はなし　λόγος
三　論語（対話）　διάλογος
四　文句　λόγος
五　ことわざ　λόγος
六　はなす　διαλέγομαι
七　とく　διαλέγομαι
八　鳥蟲の鳴き声　κλαγγάνω
九　告ぐ　ἀγγέλω [-γέ- = γο]
十　をしふ　παιδεύω (dïü - gyu > gjo).
［余白に］論語　λόγος

七　詩集『*Ambarvalia*』の「天気」再考

詩はいったん発表されると作者の手を離れる。詩は一人で批



西脇草稿 540 枚目

評に向き合わねばならない。作品の評価を公に決めるのは作者ではなく読者である。

一九四七年、西脇は『*Ambarvalia*』の新版を、ラテン語だった表題について『あむばりわりあ』と平仮名表記に直して出版した。一般的評価は旧版の方がはるかによい。私はここで両版の比較をするつもりはないが、特にこの作品の後半（LE MONDE MODERNE）において重要な修正、削除、追加が行われていることを強調しておきたい。

詩人や作家というものは、このように過去の作品に関わり続け、整形手術をほどこすくらいに事後の説明を加え、自己をリニューアルして自分の作品を新しい感性に合わせようとするものなのだろうか。

草稿（本稿二参照）にその跡を窺がう事が出来る不断の書き換えは、詩人の同じ心性の現れである。詩作品は一つの固定的解釈に尽くされるものではない、たとえ作者が自分の発想の由来を特定し詳細に明かしわれわれの想像力に限界を設けたとしても。創造された作品は作者の底意から独立したそれ固有の生命を持つ。生成研究には限界がある。

西脇の詩はしばしばある種の謎を含んでいる。それがどのようなものであるか見るために、最初の詩「天気」を再び取り上げよう。

天気

（覆された宝石）のやうな朝
何人か戸口にて誰かとさゝやく
それは神の生誕の日。

(Les joyaux à l'envers) un matin tout comme
Quelqu'un, au seuil de la porte, chuchote - qui est là ?-
C'est le jour de naissance de Dieu.（訳A：本稿）

(Un bijou retourné) un matin tout comme
Quelqu'un, au seuil de la porte, susurre avec un autre
C'est le jour de naissance de Dieu.
（訳B：新情報を踏まえた後日の新訳）

訳A作成前に古典語アグレジェのクレマン・レヴィ氏との間に以下のちょっとしたやり取りがあった。

工藤：
この詩ではすべてが異様です。括弧で始められた俳句的語句、私は当初一行目を“Un matin comme les bijoux renversés”と訳しました。しかしこれは原詩をちゃんと表現していないような気がしました。詩人は“boîte à bijoux”などとは言っていない、ただ単に“bijou(x)”。そこで最終的にわたしは“les joyaux à l'envers”を採りました。

二行目はもっと問題を孕んでいる。こういう解釈も可能だ：「誰かが、戸口で別の誰かとささやく」（訳B）、すなわちただ、「戸口で人が小声でしゃべっている」。詩人自身、一九五七年、ある詩雑誌で、詩のイメージは中世説話の挿絵から想を得ている、と言っています。その挿絵は、むさくるしい小路で語り合う二人の描かれたもので、ルオー好みのデッサンの主題です。

「何人」と「誰」かとの組み合わせは意味的にかなりおもったるい重複です。他方、「誰か?と」（訳A）と動詞「ささやく」とはしっくりとくる組み合わせではない。二つの難点の内、小さい難点の方を選ばねばならない。

三行目によってこれがキリスト降誕のイメージであるととられるかも知れない。ささやく人（あるいは人達）は東方の三博士であるのかも。どう思いますか？　降誕祭のための「覆された宝石箱」のイメージは読者にとって新しいものだったかも知れない。

クレマン・レヴィ氏の返信：
日本語のテキストのニュアンスをすべて理解したわけではありませんが、あなたの翻訳はよくできていると思います。覆された宝石箱のイメージは私にとっても大変新しい。括弧と句点を加えて《qui est là ?》としたらより「かと」を訳したことにはならないでしょうか。あなたの解釈（三博士）は正しいと思

います。そして宝石のイメージは鮮烈で興味をそそられます（それは三博士の贈り物であるか、あるいは西洋風に、樅の木のもとに散らばったクリスマスプレゼントです）。西脇はメッセージの詩人であるよりはイメージの詩人だとあなたが言う理由がよくわかります。

八　西脇が求めたもの

西脇の「天気」の詩には、各行それぞれに謎がある。一行目では今回「覆された」ものを単数にした、というのは、詩人が想を得たといわれるキーツの断片は like an upturn'd gem となっており単数だからである。（本稿五）

新倉教授によれば、二行目の情景は英国詩人『カンタベリー物語』（一五二六年）のあるイギリス人画家による挿絵に基づいている。この物語は、ある少年のマリア信仰が死後報われる話である。この知識は「神」の性格を規定するのに役立つ。クリスマス（natalis）は生誕祭である。キリスト教の聖人はそれぞれ誕生日があるが古代の神はそれがない。古代の神は誕生を超えた存在である。飯島宏一（一九三〇～、詩人、芸術院会員）はどこかで、これはギリシャか地中海世界の神であり、キリスト教の神ではないと言っている。「カミ」の語は常にキリストを指すわけではないが、神、それも特に翻訳の文脈ではイエス・キリストによって表されたキリスト教的神にしかならない。〝ひとりの神〟というべきであったか。

三行目、それは生誕の「日」である。西洋人にとって“dies natalis”（生誕の日）がクリスマスの生誕祭以外のものであり得ようか。全体として意味がより明確になるように、二行目と三行目を散文的に入れ替えることはできないだろうか。

（覆された宝石）のやうな朝
それは神の生誕の日
何人か戸口にて誰かとさゝやく

これは詩をなしているだろうか。西脇とその弟子たちは決してこれを認めないだろう。

「覆された宝石」のイメージは全く異なった源に由来している。読者は由来を気にかけない。大・萩原朔太郎（一八八六―一九四二）も師・室生犀星（一八八九―一九六二）も、西脇の「覆された宝石」のイメージを想いつかせたというこのキーツの一節を意識していない。「天気」の一行目を激賞した偉大なる師匠・室生は、二行目は古くて生気がなく、三行目は窮しているし、つき抜けたところが見当たらない、とかなり厳しく批

判している。彼が称揚している一行目は独創ではなく引用であり、そのことは冒頭の括弧の存在が示している。西脇は紳士なのだ。

メッセージの詩人であるよりはイメージの詩人として、西脇は当時の文学界の抒情的で内向的（言わゆる「浪漫派的」）な伝統と一線を画したかった。西脇は批評界に信奉者と誹謗者をもっていた。この半神の詩人には彼を聖人とする者と悪魔とする者とがいたのだ。読者たちは当初畏れの入り混じった讃嘆をもって、長期の欧州滞在帰りのこの学者の訳のわからない書物を読んだ。この学者は、萩原と室生という二大御所の後押しを受けるとともに、既にして当時日本の知識人の何人も達し得なかった高みにある西洋の古今の伝説の後光を纏っていたのである。

彼の方法は練られた心地よい言い回しを避けるところにある。漢語の音のリズムに敏感な彼は言語の調和に衝撃を与えることを目指した。

一九七〇年、「ことばの衝撃」と題されたシンポジウムの中で、西脇は漢語への愛好を語っている。日本語の「神の生まれた日」という言い回しより、漢語による「神の生誕の日」（『*Ambarvalia*』）の方に惹かれると漏らしている。彼は詩において、日本語的言い回しより漢字の音読みを好んだのである。彼は三好達治（一九〇〇～一九六四、シュールレアリズムと対蹠的な流れの代表的詩人）のような日本語に対する無条件の愛は持ち合わせていなかった。彼の愛は相対的なものであり絶対の高みに向かうことはなかった。彼をして比類なき才能の言語学者、言葉の疲れを知らぬ探究者となさしめたのは、かくれて常在しているこの永遠の相対主義である。

彼の多言語からなる草稿の、狂気に近い絶えざる書き直しもそこに由来している。

九　批評家篠田一士の見解　――西脇順三郎、学匠詩人？

西脇順三郎はヤヌス（双面神）の詩人である。彼は二つの顔を持っている。すなわち、一つはシュールレアリストとしてデビューした詩人としての顔、もう一つはほとんど終生の学者としての顔（本稿一参照）である。一九二五年、ロンドンで英文詩集『*Spectrum*』を発表した後十月に帰国の途につく。十一月に日本に帰国すると、かつて文学士として卒業した東京、慶応義塾大学の教授となり、学年はじめ（一九二六年四月）から英国中世文学と言語学の講義を担当することとなった。

西脇が文学博士なるのは一九四九年であり、その前年に博士論文『古代文学序説』を発表していた。詩人としては既に一九三〇年に文芸誌に発表された詩作品「トリトンの噴水」によって文学界の注目を浴びていた。それはシュールレアリス

ト宣言の形をとった長い散文詩だった。（この詩は二五年後の一九五五年、重要な手直し、修正、削除、加筆を施した上で『*ANDROMEDA*』のタイトルのもとに再版されることになる。）

次いで一九三三年の最初の詩集『*Ambarvalia*』（本稿七参照）となる。したがって彼はその時既に学者詩人として世に出ていたことになる。もっとも、彼の理論的指導に接することができたのは大学の彼の学生達だけだった。

西脇の学問的著作について篠田一士（一九二七～一九八九、大学教授、英国文学翻訳家、戦後のすぐれた文学批評家の一人）はこう書いている。「『古代文学序説』に代表される西脇の学問的業績は、古代ゲルマン語の言語学的研究で、詩的感興とはもともと無縁のものである。」（『日本の詩歌』中央公論新社、二〇〇三年、第一二巻三八三頁）

彼の西脇の言語研究に対する見解は重要だと私には思える。というのは、詩人をして古代のギリシア語、漢語両言語の比較研究に向かわしめたものは、その出発点において『序説』の根本主題と結びついていたと、私は考えるに至ったからである。

批評家篠田は続けていう。「西脇の詩を好む読者には、ぜひともこれ（『序説』）を読んでごらんなさいと勧めることにしている。（……）ぼくの本音をいえば、西脇の詩業と学業とはほとんど関わりのない隔絶した二世界だということを知ってほしいからである。」

そしてこう結ぶ。「古代ゲルマン語に通じないぼくなどが、西脇の学業についてなにか評言めいたことをさしはさむ余地はまったくないが、西脇順三郎を指して「学匠詩人」などと気のきいたセリフをゆめにも口にすべきでないぐらいは、学問のなんたるかを承知しているつもりである。」（同三八四頁）

このことはなにを意味しているのだろうか。篠田は西脇の書物に何らかの学問的価値を与えたくないということだろうか。

しかしながら全体的には篠田は、西脇が萩原朔太郎の偉大な後継者であることを認めている。「近代詩を現代詩に変容せしめた最大の詩人は、ほかならぬ『*Ambarvalia*』の詩人だった。西脇順三郎は現代詩の大宗である。」（同四〇〇頁）

彼の詩の発想の源泉について、この批評家はこうつけ加える。「字句の典拠をいろいろ詮索してみても、どうにもなりはしない。もちろん、詩人の側には、どの字句にも、それぞれ、典拠らしきものはあるだろうが、これはあくまで詩人自身の個人的な事情にすぎない。そういう個人的な事情をそのまま直線的に一つの詩形式にまで高めたのがロマン派の詩であるとすれば、

こうしたロマン派の方法に対して真向から挑戦するところから現代詩は出発した。少なくとも、『*Ambarvalia*』の詩人がきりひらいたモデルニスムの核心には、そうした反ロマン派的な非個人性が秘められていて、それが詩的創造を活気づけているのである。（……）『*Ambarvalia*』が刊行された当時、朔太郎の最高の詩集とよんでいい『氷島』の稿はほとんど完成していたが、そこには、ぐいと肩肱張って、わが身をロマン派に向かって乗りだしたサンボリスト朔太郎がいるのに対し、西脇順三郎はサンボリストの飛行艇から、さながら宇宙遊泳するように現代詩の未知の空間の中で、初めて手足を動かした、かがやかしいコロンブスだったのである。」（同四〇一頁）

十　「トリトンの噴水」と『古代文学序説』――学匠詩人西脇

一九三〇年、あの光輝に満ちた『*Ambarvalia*』（一九三三年）で有名になる少し前、西脇順三郎はある文芸誌に「トリトンの噴水」と題した五〇頁を超える長い散文詩を発表した。（『西脇順三郎全集』筑摩書房、一九七一年、第一巻四七七～五三二頁）。それはキュプロス（それはギリシアのキュプロス島であろうか）のサピアンス夫人家で話者が過ごした長い一夜の描写のようだ。（ようだ、というのは彼の文体は文法的に正しくはあるものの正確に何を言っているのか私にはわからないからだ！）二つの半ば架空の固有名詞「サピアンス」と「キュプロス」は既に超現実の何か、例えば夢を告知しており、詩集『*Ambarvalia*』の最も革命的な一編「馥郁タル火夫」（本稿五参照）を予感させている。

この雄弁な謎の書の中に、夢想者の脳髄から出た、詩についてのいくつかの考察を読み取ることが出来る。例えば、「詩の本質は修辞学の影にすぎない。」（同四八一頁）、「この高貴なる修辞学は無限に脳髄を喜ばせるものではあるけれども、ミユウズの教育の足りない詩人や商人の如き柔らかき額には寧ろ怒りと憂鬱をもたらすのである。」（同四八五頁）、「論理と哲学と心理とその他あらゆる科学の仕事が終わったところよりこの高貴なる修辞学は始めて仕事にとりかゝる。（……）この永遠に後天的な高貴なる詩は絶対に価値がない。（……）この詩（作者は修辞学と同一視している）は如何なる価値論をも超越してゐるものである。詩には絶対的に価値があるものでない。価値なる観念はあまりにつまらないあまりに先天的な意識にすぎない。」（同四八六頁）「しばらく言語学を歌はん。ボアロオのスチリスチツクもよし、それは慣用即ち流通性を有するスチルを好まぬところがよいのである。」（同四八九頁）

彼はまったく価値のない詩を作ることのできる詩人を大いに称揚した。シュルレアリズム宣言「トリトンの噴水」を

二五年後、より分かりやすくと書き直した修正版である「*ANDROMEDA*」の中では彼の詩に有用性をみとめることへの拒否は揺るぎないものになっている。その中で彼は文体の有用性を軽蔑するボアローの徳を、同じ言葉だがよりおとなしい調子で、称えている。（同五四六～五四七頁）

意味のない音とイメージとが彼に自信と信頼を吹き込んだのはその頃ではなかったか。詩人がこれほどこだわっていた語の聴覚映像の他に、彼は偶像に共感をもっていたようだ。「サンボリスムを象徴するシムボルはヴァレリイ、ヴァレリイを象徴するものはアルコールランプである。偶像をシムボルと思はなかったプロテスタントは実に頭が一直線であった。彼等は眼にみえるものを皆嫌った。」（「*ANDROMEDA*」同五六五頁）この断言は初版（「トリトンの噴水」）にはない。偶像拒否の宗教であるイスラムについては触れていない。少なくともこのイメージの詩の中で、彼は詩と詩言語についてこのような確固たる考えを表明している。彼はヴァレリーを評価していなかった。

彼のプロテスタンティズムに対する批判は一九四八年の『古代文学序説』を想起させずにはおかない。西脇の学問についての批評家篠田の言葉（本稿九）があるが、一見アカデミックな研究と彼の詩の間には極めて強い相関があると私は考える。国家的、個人的困難の最中（彼の渋谷の家は米軍空襲により焼失した）に推敲された三百頁の研究はかつて彼が考えたすべてのことから生じている。そこにはロンドン滞在時に抱いた考えさえ含まれている。そして私は、その後再版されることのなくほとんど読まれることのなかったこの著作こそ、われわれの研究所がすべての原稿を保有しているギリシア語と漢語の謎めいた比較に対する彼の後の情熱を説明するものだと思うのである。

十一　『古代文学序説』と日本の戦争

「もはや詩が書けない
詩のないところに詩がある
うつつの断片のみ詩となる
うつつは淋しい
淋しく感ずるが故に我あり
淋しみは存在の根本
淋しみは美の本願なり
美は永劫の象徴」

これは、西脇順三郎の『旅人かへらず』（一九四七年）の中で三九の番号を付された詩の断片であり、不思議なことにかぎ括弧に括られている。この詩集は中国大陸侵略が開始され

一九三七年に詩作の中断を余儀なくされて以降、最初の詩活動への復帰だった。

彼の師萩原朔太郎は一九四二年に世を去った。その翌年、今度は偉大な詩人小説家島崎藤村（一八七一～一九四三）が亡くなった。これらは、日本本土への空襲が激化一般化しB―29爆撃機が東京にナパーム弾を投下しに来る前に起こったことだった。この爆撃はいずれ西脇の住む町を破壊し尽くすことになる。日本は、その領土へ二つの原爆が投下された後降伏した。終戦が近付いたころ、西脇は家族とともに東京の北方、生まれ故郷の新潟に避難し戦争を生き延びた。

この詩の基調は、生気に富み、明るく、色彩豊かで、滑稽で（本稿五参照）、片仮名表記の外国語によって粋でもある『*Ambarvalia*』（一九三三年）の基調ではもはやないことに気付く。しかしながら私は、この戦後の詩断片が放つ陰鬱な雰囲気（悲しみ、落魄、孤独）が、彼の経験した国家的な大災害によってもたらされたと言おうとしているのではない。

彼の陰鬱さの種子は別のところにある。

新倉俊一教授の伝記（本稿一参照）によれば、西脇は詩作活動を実質的に中止した一九三七年に博士論文（『古代文学序説』）の執筆に取り掛かったようだ。論文執筆の開始と詩活動の中断との因果関係については、私は分からない。彼が既に優れた詩人、大学人としてのゆるぎない評価を確立していたことは言える。しかし、表現の自由を奪われたこの時代は現代文学の創作に好都合でなかったことは確かだ。日本の（詩の）伝統とはっきり対照をなした者として知られていたのであれば、なおさら目立たないようにするに越したことはなかったのだ。

古代語の研究は（たとえそれが西洋語であれ）、特高の警戒心を掻き立てずにはおかないモダニストの嫌疑から西脇を守ってくれた。彼は六年間論文執筆に没頭した。われわれの詩人はどこか（彼の詩に関するシンポジウム）で終戦の二年前、即ち一九四三年に論文は完成したと述べている。彼は原稿を弟子の一人に託した。その弟子というのは慶応義塾での西脇の後継者厨川文夫（一九〇七～一九七八）であり、当時は英文学部の助教授だった。英語学者にしてロマン派の随筆家厨川白村の息子であった文夫は、西脇の取り組んだテーマにかかわる豊富な文献を所蔵していたらしく、それを西脇は自由に利用できたようである。弟子厨川が師から託された原稿を情勢が正常化するまで大事に保管することに散々心を砕いたであろうことは想像に難くない。彼はその原稿を救った、彼自身の家と蔵書は一九四五年の空襲で灰燼に帰したけれども。

彼の原稿は戦後一九四八年に印刷に付された。その年は、本

項冒頭に断片を引いた詩集『旅人かへらず』出版の翌年だった。これら二つの著作は相次いで出版されているが、それぞれの執筆の次第はまったく異なる。論文のほうは戦前の作であり、詩集は戦後の作である。

十二　「幻影の人」西脇順三郎

『古代文学序説』（好学社、一九四八年）、この本は粗末な用紙に印刷された見栄えのしない小著である。表紙は濃い茶褐色で何の華やかさもない。破滅から這い上がったばかりの国の出版事情がいかなるものかが想像できる。作者はろくに校正することもできなかったようだ。外見は貧しさを際立たせるばかりだが、その内容はこの上なく豊かである。

この本は、序論と結語を別にすると七編にグループ分けされた全二九章で構成されている。七編は更に上下二巻に大きく分かれており、上巻は五編（二一章、約二百頁）からなる「上古人」、下巻は二編（八章、百頁弱）からなる「中世人」である。この書の目次は以下のようになっている。

上巻　上古人
序論
第一篇　幻術の世界
第一章　神々の世界
第二章　幻術の世界
第三章　原始的思考
第二編　人生観
第一章　神の世
第二章　宿命と破滅
第三章　苦痛
第四章　争闘
第五章　放浪人
第三篇　衆俗
第一章　幻術の王
第二章　政治の王
第三章　武人
第四章　女
第五章　葬儀、酒、遊戯、季節
第四編　祭祀と芸能
第一章　祭司の文学
第二章　巫女の文学
第三章　賢人の文学
第四章　詩人の文学
第五篇　芸能の原始的意味
第一章　「話」

第二章　歌謡
第三章　アイスランドの郷土生活
第四章　詩人の術
下巻　中世人
第一編　一般人生観
第一章　衆俗の人生観
第二章　農民の倫理
第三章　哲学的人生観
第四章　羅馬文学の人生観
第五章　天文学的運命説
第二編　詩人の人生観
第一章　喜劇的人生観
第二章　悲劇的人生観
第三章　ロマンス人生観
結語

『序説』のこの概要に加え、細部だが触れておくべき重要なことがある。この論文には「幻影の人」という副題が付けられていることだ。この分野の著作にはかなり稀なこの象徴的な副題は、『序説』が単なる学術論文ではなく詩的作品であることを示している。西脇の学問的仕事を詩的発想の外に位置づけた批評家篠田一士の見解（本稿九参照）にもかかわらず、私は、西脇の詩の宝石箱の鍵を、そして後年のギリシア語漢語比較への熱中の神秘を洞察する手段を与えてくれるのは、この著作であると考えるのである。

西脇は詩集『旅人かへらず』（一九四七年）のはしがきで、『古代文学序説』の初めに掲げた「幻影の人」の観念を再び取り上げ、「自分の中に種々の人間がひそんでゐる。まず近代人と原始人がゐる。（……）ところが自分の中にもう一人の人間がひそむ。これは生命の神秘、宇宙永劫の神秘に属するものか、通常の理知や情念では解決の出来ない割り切れない人間がゐる。（……）この人間は「原始人」以前の人間の奇跡的に残ってゐる追憶であらう」と、このように言っている。彼は彼自身の中に、太古の時代に自分がそうであったなごりを探しているのだ。このなごりとは、詩人その人のことではないだろうか。

十三　西脇順三郎とソシュール

『古代文学序説』（一九四八年、本稿一二）を読むと、ホメーロスの作品への言及がほとんどないことに気づく。『*Ambarvalia*』の第二部（LE MONDE MODERNE）を「ホメーロスを読む男」（詩群「失楽園」の最後）で締めくくった詩人は、「宿命と破滅」と題された上巻第二編第二章で一度だけ『イーリアス』の一節（第六歌一四六行から一四九行）を引

用している。

「蓋し木の葉の類と人類とは同じもの
一方では葉は風が地上に散らし落とすが
また春の季節が来ると、また森はしげる。
人類も亦一方で成長するがまた一方では止む。」

ホメーロスの引用はこれ一つであるが、この唯一の引用は『序説』の主題でもある「幻影の人」の運命を象徴している。

ホメーロスへの顧慮の少なさは、西脇の論文のテーマが（地中海世界でない）ゲルマン世界の、しかも言語学的というより社会学的なものであった事実によっておそらく説明できる。彼は古典研究の最良の機関の一つであるオックスフォードの知識は一部しか利用できなかったであろう。彼が仕事に取り掛かったときには英国からの帰国の十二年後であり、日本において弟子であり同僚であった厨川の家にあった豊富な関連文献に資料を求めたのだった。（本稿十一参照）

彼の研究分野は古典語（ラテン語とギリシア語、アリストテレスのラテン語版『詩学』）、古英語、ガリア（ケルト）語、高地ドイツ語、古アイルランド語、古代ノルド語といったゲルマン古語、それにフランス語、イタリア語、トルバドゥールの言語などのロマン諸語でにぎやかである。西脇は言葉の本当の天才である。仕事の言葉としては英語、ドイツ語とフランス語を使っている。スラブ語、アラブ語、サンスクリット語は著作には見られない。彼は多言語使用者ではあったがプロの比較言語学者ではなかった。

彼の参照した書物は大部分英語文献であり、他の多くはドイツ語文献だった。ローマ時代のゲルマン人の社会、風俗、心性を記述するに当たって特に援用したのはタキュトスの『ゲルマニア』とのカエサルの『ガリア戦記』。それ以外に中世のフランスの作品、作家の名を挙げることができる。すなわち『ローランの歌』、マリー・ド・フランス、『ブリュ（ト）物語』のウァース、クレティアン・ド・トロア、『薔薇物語』のギヨーム・ド・ロリスとジャン・ド・マンなどだ。

何人かの現代フランスの言語学者、歴史家、社会学者もいる。B-G ロラン・デルスヴィル（十八世紀政治家）、ガストン・パリス、ジョゼフ・ベディエ、レオン・クレダ、アルフレッド・ジャンロワ、アルベール・グルニエ、フュステル・ド・クーランジュ、フェルディナン・ロ（ト）、ギュスタヴ・コエン、ギュスタヴ・ランソン、アルセーヌ・シャッサン、ジャン・ジュール・ジュスラン（外交官作家、『ラングランド叙事詩』）、そして社会学者で人類学者のリュシアン・レヴィ・ブリュール（一八五七～一九三九）。このブリュールについては後にまた触れる予定で

ある。

著作の構成（本稿十二参照）とこの参照人物リストから、『序説』の内容が大体いかなるものか推測が可能だろう。西脇は勿論ゲルマン語とロマン語の歴史的音韻学にかかわる深い知識を持っていた。ドイツ語の比較言語学者、グリム兄弟やルドルフ・トゥルナイセン（一八五七～一九四〇）、カール・フォスラー（一八七二～一九四九）の著作への頻繁な言及がそのことを証している。

フランス学界のある種の比較言語学者の著作には触れることがなかったようである。その欠落中の大きな名としては、アントワーヌ・メイエ（一八六六～一九一三）、そして特に彼の師フェルディナン・ソシュール（一八五七～一九一三）とミシェル・ブレアル（一八三二～一九一五）がある。若きヴァレリーはブレアルの『意味論試論』（一八九七年、パリ・アシェット）に対し美しい賛辞（メルキュール・ド・フランス二五号、一八九八年一月）を寄せている。このブレアルの文学作品ともいうべき著作は英訳され英米言語学の古典となった。

偉大なスイス人ソシュールはライプチッヒで二つの論文（一八七九年、一八八〇年）を完成させたのち、特にカール・ブルグマンやトゥルナイセンやフォスラーに代表される一種の厳格主義が支配的だったドイツ学界を去り、ブレアルの講義を受けるためにフランスに移り、高等研究学院 Ecole pratique des Hautes Etudes において彼の後を継ぐこととなる。

西脇は、その詩においてソシュール言語学に類似するところは全くなかったが、後年の講義においてソシュール言語学に触れることはあったと思われる。私は両者の晩年の仕事、すなわちソシュールの「アナグラム」と西脇の「ギリシア語漢語語彙比較」の間に、ある種の観念の共通性を指摘せずにはおられない。二つの著作は一見するところ無意味なものであるが、そこには「音声イメージ」（「シニフィアン」、ブログ一号参照）の関係規範をうちたてたいとの彼らの隠された意志があるのではないか。それは詩的言語刷新の究極の試みではなかろうか。

十四　戦争を通り抜けた「幻影の人」

真正な比較文法の関心の範囲からは少し離れたところで、西脇順三郎は哲学者社会学者リュシアン・レヴィ・ブリュール（一八五七～一九三九）の仕事に興味を抱いていた。『序説』に登場するフランス人著者の中でレヴィ・ブリュールは上巻（「上古人」）第一編第二章（「幻術の世界」）で最初に引用され、その回数は三回（二一～二三頁）にわたっている。（本稿十二参照）

「（原始人は）今日の人よりも、ものを神秘的に考へるのであった。神秘といふことを恐れた。すべて感覚し得ない内面的な

ものを神秘的なものとし皆内面に潜んでゐると考えた。外面的に物理的にものを考へない。或る人は原始的心性は形而上学者の心性とあまりかはらないといふ。」西脇は註の中で「或る人」とはレヴィ・ブリュールのことであると明かしている、ただし、出典は示していない。

もうひとつ「原始文化の研究者は原始人が神秘的にものを見るのは何か論理以前の作用のやうに考へる」と別の引用をした後でも、西脇は註の中でこの「研究者」とはレヴィ・ブリュールに他ならないと明かしているが、どの著作からの引用であるかはやはり読者に示していない。

当の著作が「『原始の心性における超自然と自然』序論一六」とはじめて名指しされるのは第三章冒頭（「原始的思考」三十五頁）においてである。彼は『原始の心性』は序論しか読んでいないようだ。

レヴィ・ブリュールは社会学者、道徳と宗教感情といった原始人の心性の分析家として知られている。『原始の心性』は一九二二年、西脇順三郎がロンドンに初めて赴いた年にフランスで出版された。彼の『序説』は日本で一九四二年か一九四三頃に完成されている。『原始の心性』入手は日本帰国（一九二五年）後であったかもしれない。彼の有名な「幻影の人」（本稿十二参照）の概念はレヴィ・ブリュールの考えと結びつきがあることは間違いないと思われる。

『序説』の序論で著者は言う。「人間は無意識ながら神秘的な人生観的情念をもってゐるものとする。さうした情念は神秘的な存在であって、或る象徴によってのみかすかに意識されるものである。それは人間の凡ゆる思想、凡ゆる信仰、凡ゆる生活体験より孤立してゐる幻影である。生命の根元とも真の人間の姿とも、土の幻影とも考へられるものである。この生命の幻影を「幻影の人」と名づけることが出来る。（……）「幻影の人」は吾々の中に皆あるものであるが、それが無意識の状態にかくされているので、意識の世界から孤立して暗く吾々の中にいつも深くひそんでゐるものであると思はれる。「幻影の人」は原始的な人間の一つのタイプであり、最古の人間の姿である。けれども永遠に人間の中にかくれて残る生命の神秘である。」（四頁）

「さうして「幻影の人」の象徴を近代文学よりも古代中世文学の方が私にとりてはより近く現はしてくれるやうな感じがする。それがために先づ、古代中世文学に現はれてゐる思想感性を系統的に或は断片的にいくつかの人生観に分解してみる。これが本書の目的であった。」（五頁）

『旅人かへらず』のはしがきの中におかれた「幻影の人」に関する西脇の文章（本稿十二参照）は、引用した『序説』の序論の文章を基礎づけている理念と同じ理念を、別の言葉ではあ

るがより文学的に洗練された言葉で、再現していることを読み取ることができる。

『序説』（一九四八年）と『旅人かへらず』（一九四七年）とのこれらすべての引用からどのような興味深い結論がひきだせるだろうか、原始人についての観念が変わることなく、無傷で戦争を通り抜けたということ以外に。というのも、『序説』の原稿は終戦（一九四五年）の二、三年前には完成されており、一方『旅人かへらず』のはしがきの方は明らかに戦後執筆されたものなのだから。

十五　いわゆる喉音理論と西脇順三郎

『序説』（一九四八年）第五編第四章「詩人の術」で、西脇は古ゲルマン語における頭韻法を検討している。そこで、母音の畳韻を避ける理由についてこう説明している。「母音の頭韻は子音のそれに比して困難が大であることは明らかである。母音をもつて始まる言葉の数は子音をもつて始まる言葉より遥かに少ないのである。（……）母音の頭韻は音楽的効果がそれ自身子韻のそれに比すれば単調でもあり、色彩にたとへれば単色であり、寧ろ無色であり、単調になる。（……）一説に母韻の場合は、“glottal stop”を頭韻にしたものであるといはれているが、実際の問題として歴史的事実を確かめることが出来ないのが残念である。またホメーロスの場合の digamma の如く言語的に証明することが出来ないので、この説はいまのところ未定の問題として残ってゐる。」（『古代文学序説』好学社、一九四八年、二一〇～二一一頁）

印欧語母音組織に関する論文（一八七九年）で提出されたソシュールの有声音係数（現在では、[e] の母音音色をもつものは *H1*、[a] の音色は *H2*、[o] の音色は *H3* で表される喉音）の理論は、ギリシア語の長母音（η, ω, ᾱ）の形成をただ一つの印欧語母音 [e] を出発点として説明しようとする試みから生まれたものだった。

η, ω, ᾱ を得るために、ソシュールは図式として、η に対しては *eH1* を、ᾱ に対しては *eH2* を、ω に対しては *eH3* を想定した。「*e*」は共通であるのでこの図式は *H1*（> e）, *H2*（> a）, *H3*（> o）に還元される。「*H*」は母音的音色の子音である喉頭音（声門あるいは咽頭音）の略号である。喉頭音は消失するか音韻的に語の中に実体化する。

ソシュールの発見は、実在する言語の中にそれを支える事実と具体的証拠がなかったためにほとんど無視されていたが、フロズニーによるヒッタイト語の解読（一九一七年）の十年後、ヒッタイト語音韻の研究に取り組んでいたポーランド人言語学者クリウォヴィチ（一八九五～一九七八）の論文において

信憑性が与えられた。アントニー・フォクス（『言語学の再建』オックスフォード大学出版、一九九五年、一八〇頁）によれば、ヒッタイトの動詞語根 /pahs-/「保護する」はラテン語の [pa:sco]「（家畜に）草を食べさせる）」に対応し、/hantezzi/「最初」はギリシア語の [anti]、ラテン語の [ante] に対応し、また /harkis/「白い」はギリシア語の [arge:s]「白く輝く」に対応する。喉頭音はここでは -h- の略号で表示されている。ソシュールの理論を敷衍すると印欧語の語根が語頭に母音をもつことはあり得ないということになる。

ソシュールの没年は一九一三年であり、西脇の日本帰国は一九二五年であったことを思い起こしておこう。

ヨーロッパにおけるいわゆる「喉音」理論に至る学問的論争の全く外にいて、西脇ははたして議論の要点を把握していただろうか。そのようには思えない。印欧語語根の語頭が常に子音である可能性については念頭になかった。古ゲルマンの詩が子音の喉頭音が消失した言語の状態を反映しているとは思っていなかった。しかしホメーロスの読者として、彼はディガンマがどんなものであるか知っていた。ディガンマは隠された音を明らかにし、韻律上の不足を補うことができる。ディガンマは隠された音、原始の音の反映である。

線文字B（ミュケーネ時代ギリシア）の解読も同様に、各語の語頭に子音を想定するソシュール理論の正しさを確認するきっかけとなった。その解読は anax「王」を (w)a-na-ka に復元することを可能にした。空虚から実在する音 (w) を作り出したのだ。西脇は『序説』中でミュケーナイ語に言及することはできなかった、その解読は彼の論文出版（一九四八年）の後に行われたからである。『ミュケーナイ時代ギリシアの文書』（ケンブリッジ大学出版）の出版は一九五六年になってからであり、それは西脇がギリシア語漢語比較に取り組む六年前のことだった。

慶応義塾大学は英文学部の言語学教授として迎えるべく西脇をオックスフォードに派遣した。言語学と詩の両分野での彼の活躍をもたらしたのは、そのギリシア・ラテン語の素養だった。

十六　ソシュールによる αγαμέμνων の語源と西脇の比較基準

一八八〇年、ライプチヒにおいて『サンスクリットにおける属詞独立用法』の論文により summa cum laude（最優秀で）博士号を得たソシュールは、高等研究学院 Ecole pratique des Hautes Etudes での、師ミシエル・ブレアルの講座の講師としてパリに居を移した。ブレアルは当院の創設者の一人だった。それ以降、ソシュールは小論文しか書かなかったが、その中に

ホメーロスの英雄 Agamemnon の名の語源に関する論考がある。それはミシェル・ブレアルが一八六八年に設立し終身主宰であった言語学協会の研究誌『言語学協会論文集』Ⅳ（一八八一年）に発表された。

線文字Bの解読にあたってヴェントリスの協力者であったジョン・チャドウィックは彼の『ミュケーナイ世界』（一九七七年）において粘土板に現れる人物名についてこう述べている。「明らかにホメーロスはミュケーナイ時代のギリシアに知られていなかったタイプの名は使用しなかった」と。ところがミュケーナイの名でホメーロスの英雄の名に正確に対応するものの中に、アカイアの英雄 Agamemnon、トロイアの英雄 Memnon の名は見当たらない。（ヴェントリス、チャドウィック共著『ミュケーナイ時代のギリシア語文書』ケンブリッジ大学出版、一九五六年、一〇四～一〇五頁）

ソシュールの提示する Agamemnon の語源説明は算術的単純さを持ったものだ。「-μέμνων は *-μένμων の置き換えであることを認めさえすればよい。」(…)「この MeNMoN という形は鼻唇音と鼻歯音を交互に二回発音することを強いる。この位置においては、中間の n と m は、それらの音を引き寄せる器官の音に近付くために、お互いの位置を交換することが要請される。」（『言語学協会論文集』Ⅳ、一八六八年、四三二頁。この論文は『ソシュール学術論文集』ジュネーブ、スラットキヌ・リプリント、一九八四年、四〇三頁に再録された）

この音位転換と同一化による解決自体に目覚ましいところは何もない。注目すべきは、ソシュールが一八八一年の教授活動の最初期から固有名詞の語源に関心を持っていたことだ。固有名詞は概念なしに完全に機能する。私はブログ一号で、固有名詞は概念を必要としないこと、そして意味を与えられるとむしろ機能が阻害されることを示した。ソシュールは Agamemnon という記号をギリシア語の文脈（*μεγιστω > μέγω）によって有意なものにしようとしていた。

ソシュールは、『講義』の中で「記号の恣意性はだれにも反駁できない」と言い、記号は「自然に」形成されたものだとするクラチュロスのテーゼについての言語学的、というより政治-哲学的な古来の論議の痕跡をとどめている。アンドレ・シェルヴェルは十九世紀の記号の恣意性の議論について、「歴史比較文法の発展により恣意性の問題は、はっきりとした枠、すなわち〈原始語根〉の枠の中に位置づけられた」と言っている。（「ロマンティスム」二十五～二十六号、一九七九年）

基本的に表意文字の国である日本においては、議論はこのような形をとらなかったし、これほどの広がりも持たなかった。

というのも、日本語のシニフィアン（音声イメージ）は根本では音声的なものでないからだ。イメージはむしろ視覚的だ。それは記号ではなくgramma（ギリシア語 γράφω「書く、描く」からきた）である。grammaは意味と切り離せない。中国や日本において西欧やサンスクリットの音素概念がなぜ発展をみなかったのか、今やよくわかる（ブログ十七号、十九号参照）。音（あるいは音のイメージ）は音節という意味の究極単位の一構成要素にすぎないのだ。

西脇の後年のギリシア語漢語比較に注いだ情熱をみると、彼が記号の恣意性の原理に与したとは私にはとても思えない。一方、彼は比較文法の方法論のいくばくかを受け継いでいる。漢語「發」（hotsu, hatsu 本稿六参照）に部分的に対応するとされた二十ばかりのギリシア語の中で、彼は両言語を結び付けていると思われるいくつかの音に印をつけている。すなわち、:ka-, -kha-, -khô-, po-, pa-, ba-, pha- phê-, phu-, hê-, ho- であり、これらはいずれもkh(V)- とph(V)- の二つの原始音に帰せられる。そのうちph(V)- は上古漢語の形「発 puăt」（元はpa(t)）（ブログ二二号参照）に結びつけることができるのである。

十七　西脇順三郎の詩的ヴィジョンの狭窄

西脇順三郎は英語、フランス語、ラテン語で詩を書いた。新倉教授（本稿四参照）は詩人が一九二五年、ロンドンで英語詩集『*Spectrum*』を自費出版したことを伝えている。この詩集は周囲に強い関心を呼び起こしたようだ。また彼は、オックスフォードで組織された詩のコンテストにラテン語で参加することも望んだようだ。更に、フランス語で書いた自作の詩をフランスで出版する意図も抱いていた。

しかしながら『*Ambarvalia*』（一九三三年）以降の彼の詩作品の主要言語は日本語だった。

もっとも（ラテン語タイトルの）『*Ambarvalia*』の中にはラテン語の題の詩が二編ある。「Catullus」と「Ambarvalia」である。「カリマコスの頭とVoyage Pittoresque」はギリシア人名とフランス語の題である。「哀歌」という詩はもともとすべてラテン語で作られたもののようだ。そこにはギリシア語の語句 Καλὸς τεθνήκε μελικτάς（美しい詩人は死んだ）をラテン文字で記した「Kalos tethnake melikras」さえ見出すことができる。これはイタリアで客死した彼鐘愛の詩人ジョン・キーツを歌った哀歌だ。これらの古典語についての注釈はすべて『*Ambarvalia*』の第一部LE MONDE ANCIENにかかわるものである。

第二部LE MONDE MODERNEの中には、シェイクスピ

アの『ヴェニスの商人』の登場人物 Shylock の名にちなんだ英‐仏語の副題 Shylockiade を付した詩がある。この詩は地獄に赴くシャイロックを風刺する紙芝居としてつくられたものだった。

『*Ambarvalia*』の改訂版『あむばりわりあ』では、興味深いことに全体的にアルファベット表記は削除されている。そこからラテン語の哀歌は追放され、その運命は、地中海的明晰さを放つ美しい詩『コップの原始性』（本稿三参照）も同様だ。アルファベット表記としては LE MONDE ANCIEN と LE MONDE MODERNE の二つの見出しのほかは僅かしか残っていない。ラテン語で「*AMBARVALIA*」と題する詩には初版にはなかった日本語の訳注が付された。

一九三三年版詩集『*Ambarvalia*』は新しく明るいヨーロッパ風の絨毯を思わせる。一方、一九四七年の『あむばりわりあ』はそれがほとんど「畳」化されている。新倉教授は皮肉を込めて、改訂版は初版の注釈書の役割を果たしている、と述べている。

これらのアルファベットの語はそれに敏感な少数の人にとっては明るく西洋的な響きを持っている。戦後西脇の詩は変化し、詩集『旅人かへらず』の感傷的雰囲気の中で内に籠り、内向的になり、復古調になった。それは昔の友人たちを一人ならず絶望せしめたのだった。

「天使のわきを過ぎ金髪の少年が走る（…）魚を（…）指の間でしつかりつかみながら」、これが彼の詩の中で私が最も愛するイメージだ。ところが、このヴィジョンが詩集『第三の神話』（一九五六年）の「人間の没落について」と題する詩では、暗く疲れて再び現れる。ここに存在する少年天使はなるほど若く金髪ではあるが、ほとんどすれて、しなび、縮こまっているようだ。この詩集によって西脇は一九五七年読売文学大賞を受ける。

金髪の少年の天使がウグイという
魚を持ってはだしになって歩いて来た。
なにかヘブライ語をつぶやきながら・・・
（人間の没落について）

一九三三年の原詩は少年を次のように描いている。

林檎とサーベルをもった天使のわきを過ぎ
金髪の少年が走る
アカハラという魚を
その乳光の目の上を
指の間でしつかりつかみながら
（コップの原始性）

詩「人間の没落について」において、天使と一体化した少年はヘブライ語でこうつぶやく「この辺に粟がないということは／けしからん　かなりやなどは飼えない」。これを語る言葉は柔弱であり、くすんで古ぼけている。西脇という詩の水車を回すに足る水を導く力をもはや持っていない。原詩のイメージからはなんという違和感だろう。

彼のその後の作品、そして特にギリシア語漢語比較は、徐々に閉ざされていった世界からの脱出の試みと捉えることができる。

十八　記号の恣意性と原始語根

言語記号の恣意性について、音素からなる西欧語と意義素から構成される文節言語である中国語、日本語などの東洋言語の間には、大きな観点の相違がある。ソシュールが言語という時それは口頭言語を指す。記号の恣意性は口頭言語を前提としている。

そこで問題とされるのはシニフィエ（概念）ではなくシニフィアン（音声イメージ）である。ヨーロッパではプラトン以来、名と物との間の関係は議論の的であり、二つの考え方が長い間対立してきた。すなわち、「自然的」関係（クラチュロスの主張する φύσει）と「慣習的」関係（ヘルモゲネス主張の θέσει）である。

ところがソシュール以降、議論は様相を変えた。もはやモノの名の問題ではなく、音（音声イメージ＝シニフィアン）と意味（概念＝シニフィエ）に分析可能な記号の問題となった。ソシュールによればシニフィアンとシニフィエとの間の関係は恣意的である。この教えに対してバンヴェニストははっきりと異論を唱えた。（Acta linguistica1、一九三九年、コペンハーゲン。この論文は『一般言語学の諸問題1』ガリマール、一九六六年、四九～五五頁に再録されている）

バンヴェニストによれば、恣意性が存在するのは記号とその対象の間である。私はここでブログ初回の号で割愛した文章を引用したい。「〈bœuf 牛〉の概念（シニフィエ）は私の意識中では〈böf〉の音声全体（シニフィアン）と必然的に一致している。どうしてそれ以外であり得よう。これら二つは私の頭の中に一緒に印刷されている。二つはあらゆる状況下で一緒に喚起される。その間にはあまりにも密接な共生関係が生じているので、〈bœuf〉の概念はさながら音声イメージ〈böf〉の魂のようだ。」

このバンヴェニストの見解には、ローマン・ヤコブソンの見解がこだましている。「音と意味との緊密性は語り手に、この外的関係を内的関係によって補完しようという気持を起こさせる」（ブログ一参照）

西脇がこの詩の恐るべき問題にどのように向き合ったかをみる前に、表意文字の国の状況を知るために、彼の詩の中から一つささやかな例を取り出してみよう。

「天気」（『*Ambarvalia*』）の第二行目はこうなっている。

何人か戸口にて誰かとささやく

ここには「何人」「戸口」「誰」三つの漢語がある。あとの二つ「戸口」「誰」の読み方に問題は生じない。しかし、「何人」の漢語は何通りかの読み方が可能だ。すなわち、「なにじん」（その例は彼の詩集「失われた時」一九六〇年の第二歌にもみられる）、「なんにん」、「なにひと、なにびと、なんびと」。意味を決定するのは語形ではなく、詩全体、それは文脈ということにもなるが、その解釈の仕方だ。最後の三つ（なにひと、なにびと、なんびと）は多少のニュアンスの差こそあれ同じ意味だ。西脇は「なにひと（あるいは、なにびと）」の読みを好んでいたようであり、この選択は「なんにん」とか「なにじん」は排除することになる。

ここでは、-nani/ -nan、-hito/ -bito の間の音声上の差異は大きな意味を持たない。重要なのは「何人」という単位が、意味の差異を伴う幾通りかの読みを可能にするという事実である。西脇に限らず日本語を使って仕事をする詩人は、このように読者に自分の読みを選択する余地を残している。漢字の意味は視覚的に理解される必要がある。聴覚はわずかの助けにしかならない。更にそこに、意味上の仮名の区別の問題が加わる。「誰かと」は二通りの区切り方が可能だ。すなわち、「誰|かと（一緒に）」と「誰か(?)|と」だ。これは心の中の句読法である。

このような状況下において、西洋の記号の恣意性原理で割り切ってしまう贅沢が許されるだろうか。語彙の真実を探求する詩人は、西脇のように原始語根の発掘に向かうのである。

十九　「原始語根」を求めて

フランス方言学の方法論を実証した『蝸牛考』（一九三〇年）の著者柳田國男（一八七五～一九六二）は、一九二一年から一九二三年にかけてヨーロッパに滞在した。その期間は一部西脇と重なっており（西脇の滞欧は一九二二年から一九二五年）、

二人はロンドンで出会い意気投合している。

「座る」という動詞概念は標準的日本語では「suwa-ru（アクセントなし）」と発音される。私の生まれ故郷の東北方言では、同じ概念が「nema-ru（-ma- にアクセント）」と全く異なる言い方でいわれる。「suwa すわ-る」の他動詞形は「sue-ru」（座らせる、置く）であり、これはより古い「su-wu」の形に遡る。ここで、添加語中音（ブログ三二～三六号参照）である -r- は後のものであるので suwa-ru、sue-ru そして suwu の原始語根は suw(V)（置く、座らせる）と推定できる。

Nema-ru の形は「座る、平伏する、寝る」の意味で一六世紀から使われている。一六世紀の日葡辞書では「腐る」の語義をあてている。Nema-ru（寝ている）は「腐る」ことを意味していたのだ。

Suwa-ru/ suw(V) の図式と同様、nema-ru の原始語根として nem(V) を想定することができる。Nem(V) は私に nemu-ru（眠る）、nemu-ri（眠り）を喚起する。Suw(V) と nem(V) との間には、現実の用法における意味上の共通性にもかかわらず、語源上の共通点はない。東北においては「座る」の概念はむしろ nema-ru に結びついている。

方言学は記号の恣意性の原理を前提とした学問である。言語地理学の創始者ジュール・ジリエロン（一八五四～一九二六）がソシュールのようにスイス人であり、ボルドーの優れた方言学者ジョルジュ・ミヤルデ（一八七六～一九五三）がランド地方出身、ブレアルの後継者でありソシュールの弟子であったアントワーヌ・メイエ（一八六六～一九三六）が中央部ムーランの出身、現代音韻学の優れた理論家アンドレ・マルティネがサヴォア出身であること、これらすべて驚くには当たらない。

いずれも地方出身者であるこれらの偉大な言語学者は共に、記号の恣意性を越えて、アンドレ・シェルヴェル（本稿一六参照）というところの原始語根の探求に努めたのである。この始原の探求は十九世紀の終わり、二十世紀の始まりを画すもののように思える。

語源に並々ならぬ興味を示したプルースト（一八七一～一九二二）は当時のこの言語学思潮から離れてはいなかった。彼は村の司祭に、話者の叔母の求めに応じる形で、コンブレーのサン・ティレール教会の守護聖人について長談義をさせている。

―　でも、わたしにはどこに聖（サン）ティレール様がいらっしゃるかわかりません。

―　わかりますとも、ステンドグラスの隅の方です、全く気がつきませんでしたか、黄色い服を着た婦人が描かれてい

るのが。あれがサン・ティレール様で、ご存じのように、地方によってはこれをサン・ティリエとかサン・テリエとか、それからジュラ地方ではサン・ティリなどとさえ呼んでおるのです。こういったいろいろな Sanctus Hilarius の堕落（＝訛り）は、福者の名に起こった転訛の中で特に珍しいというわけではないのです。たとえば、ユーラリさん、あなたの守護聖人の聖女エウラリア（Sancta Eulalia）の名がブルゴーニュ地方でどうなったかご存知かな？　なんとほかでもない、聖テロワですぞ。聖女が男の聖人になったのです。

（『失われた時を求めて』ガリマール・プレイヤード版、一九五四年、第一巻一〇四～一〇五頁）

ここで注目されることは、両性具有のテーマは別として、幾度にもわたる「堕落」の淵源にある原型 Hilarius ヒラリウスの探求である。

メイエの弟子でもあったケルト研究家ジョゼフ・ヴァンドリエス（一八七五～一九六〇）は、プルーストがソルボンヌの学生時代にオーギュスト・ロンニョン（一八四四～一九一一）の地名学の講義を受けたと推測している（『雑録』エドモン・ユゲ、一九四〇年、一二五頁）。『スワン家の方へ』の第三部にして最終部はあまり小説にはなじまない「土地の名・名」と題されており、この題は『花咲く乙女たちのかげで』第二部の「土地の名・土地」と対をなしている。

フェルディナン・ソシュールはそのアナグラムを通して、マルセル・プルーストはその地名、姓名の語源、そして西脇はそのギリシア語漢語比較を通して、お互い相知ることはなかったものの、同じ目標、すなわち「原始語根」を追求したように思える。そして彼らはいずれも失敗した。

というのも、いかなる原始語根も存在しないからだ。すべては時の中のある段階である。Μέγγων（本稿一六参照）は μένω の重複形でありうるし、μένω は νέμω と入れ替わり得る。Hilarius は、途中の一段階を示すにすぎず、語根ではない。西脇の hotsu、hatsu（發）も同様だ（本稿六参照）。しかしながら、彼らの夢想は大いに報いられた。なぜなら、彼らは一見無駄な仕事のあとに、詩的言語のはかり知れない可能性を残したのだから。

二十　滝飲、ポール・アヌイ「庭園の苦悩」の人
――エピローグ

私の尊敬するフランスの布教師が

麦畑のなかの神学校に住んでいた
彼はエル・グレコの「庭園の苦悩」
に似ている
やがて戦争になった時私は憶った
《今頃はフランスの田舎へ帰って
いるだろう
ピレネ山脈の下へ
葡萄酒を水筒から滝飲する百姓の中で
親類の人々と話しているだろう
練馬にいた時のようにホテチュウスを
読んでいるだろうか》
ところがこんな感情はむだであった
彼は戦争中日本を去らなかったのだ
冬の午後コンクリートの橋を渡つて
先生の家を訪ねた
病院の診察室のような書斎にとおされた
つきあたりに美人の油の肖像がかけてあった
なかなか話せる坊さんだと思つたせつな
先生は「これは射殺された妹だ
まあ　カナダの麦酒でものみましよう」と
つけ加えた。（……）
（「庭に菫が咲くのも」『近代の寓話』、一九五三年）

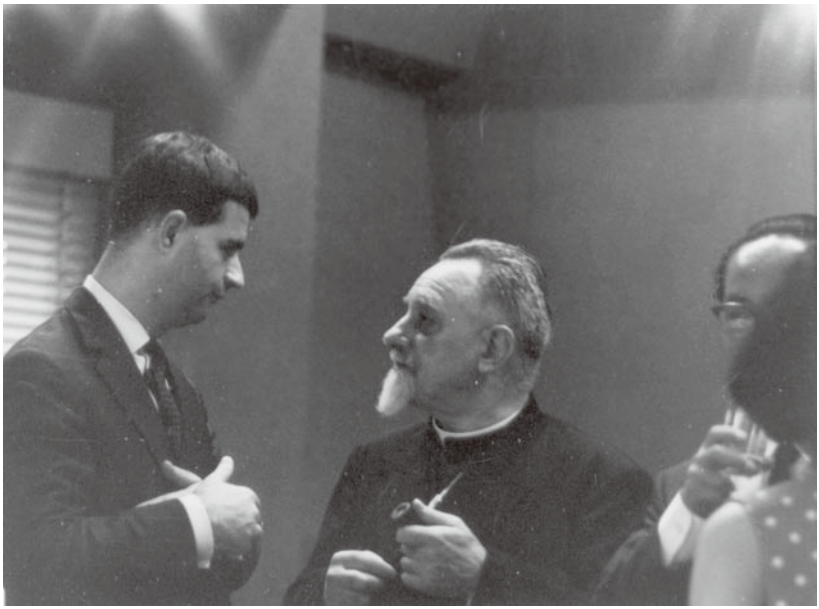
これは六六行からなる詩の抜粋である。西脇はここで、神父とのこの会話で知ったばかりの表現 « boire à la régalade » にあたるものとして、「滝飲」という比喩的表現を用いている。

戦争中も日本にとどまったこのフランス人布教師の名は、同じ詩集のもう一つの詩「野の会話」でも出てくる。その詩で彼は同じグレコの「庭園の苦悩の人」のテーマを再び取り上げている。

今年も夏がすぎた
エル・グレーコの描きそうな顔をした
アヌイさんはどうしているだろう
「庭の苦悩」を見て思い出した
今頃は、ピレネー山脈の下で
水筒から滝飲する百姓の中で
親類の人達と話をしているだろう
葡萄酒を飲みながらホラチュウスを
少し読んでいるかしら
ねりまにいた時分のように。

私は、フランス語習得時代、一九六一年から一九六六年にかけてポール・アヌイという五〇才代のフランス人布教師のフランス語の講義を受けた。彼はアテネ・フランセと東京日仏学院で教えていたのだ。パリ外国布教教会の極東派遣員として、慶

ポール・アヌイ先生（アテネ・フランセ、1964 年 6 月卒業式、工藤進撮影）



ポール・アヌイ先生（アテネ・フランセ、1964 年 6 月卒業式、工藤進撮影）

応のフランス語、古典語講師でもあった彼は、そこで学生、同僚としての西脇順三郎に出会ったのだと思われる。若い時はグレコの「庭園の苦悩」の男に似ていたのだろうが、一九六〇年代前半の彼は白髪交じりの短い髪をしていた。私達は十人位で彼を囲む小さなグループを作っていた。それは東京オリンピックの前後だった。

彼の使徒としての道を動機づけたであろう妹を襲ったドラマについて彼が話すのを、確か私は聞いたことがあるような気がする。オット・ガロンヌ地方モンレジョ近くの村の出身で、比類なく明るい、熱のこもった、ピレネー風の声をしていた。グレゴリオ聖歌の大変な愛好家で学習院合唱団の指導もしていた。“Lo beth céu de Pau”（ポーの美しい空）（本稿三参照）はガスコーニュ地方の一つの歌謡の題だが、それでもって彼は周りの人をしばしば楽しませたものだった。

アヌイ先生の日本に来た年はいつか私は知らないが、一八九四年生まれの西脇順三郎はアヌイ神父より十歳以上年長である。西脇は、アヌイ先生が日本人とともに戦争の悲惨に耐えたことに心を動かされたに違いない。

新倉教授は先日電話で、晩年の西脇は以前の詩作品よりギリシア語漢語比較草稿の方により愛着を感じていて、地震の前触れがある度に、草稿のはいった木綿袋を自らの身より先に救うべく階段から転がり落としていたようだ、と教えてくださった。偉大な詩人西脇と私が、同じフランス語の師の兄弟弟子であったことが最後に確認できたことはうれしいことである。

訳者付記

本稿は、工藤進教授が仏文で誌した西脇順三郎論 “Le poète japonais qui s'est adonné à la comparaison gréco-chinoise : Nishiwaki Junzaburô (1894-1982)” の全訳である。原文は教授自らのブログ “Philologie d'Orient et d'Occident” の二〇一〇年七月二七日号から同年九月二九日号まで二十回にわたって掲載されている。

日本人が外国語で書いたものを別の日本人が日本語に訳すというのは異例かもしれない。実際、この日本語訳の話を著者ご本人から頂いた時、ご本人が日本語にされるのが一番だし、それでなくとも、詩人や言語学が専門のより適任の方がおられると思い躊躇があった。しかし、フランス語で考え書いたものを日本語に直すのは苦痛です、とおっしゃる。また、ブログ愛読者の一人、西脇草稿に惹かれている者の一人として、この文章をより多くの人に読んでいただく手伝いが出来るならうれしいことだと考え、著者の校閲をいただく前提でお受けしたような次第である。

引き受けはしたものの、原著者が日本人なのに「日本語に直すのが苦痛」ということに関しては、当初は半信半疑というのが正直なところだった。ところがその後、あるいはそういうこともあるのかもしれない考えるようになった。西脇順三郎もラテン語や英語、フランス語で詩を書いた。しかしその自作欧文詩集について、中からいくつかの詩を和訳することはあったものの、訳詩集のような形のものは出すことはなかった。世界に多言語の使い手である作家、詩人は多いが、ある言語で書いた自作を自ら他言語に訳す例はやはり稀なようだ。それと似たことが、俳句の世界などにも見られることに気づく。自句自解というものがあるが、これは自句自解をやる方も気が進まないものであるようだし、聞き手、読み手にとってもこれほどつまらないものはない。作者は作品によってしか語りようがないものなのだろう。ここら辺の事情には、バンヴェニストの「恣意性」に関する見解（本文十八）につながる言語の機微が隠されているのかもしれない。

本稿原文はいろいろな西脇の詩や文章、言語学の学説を取り上げ、それらの間を暢達な文章で自在に行き来している。ところどころには、著者独自の明察がさりげなくはさまれている。そして一貫して流れているのは西脇の残したギリシア語漢語語彙比較草稿への著者の深い共感だ。これを読み終える時浮かんでくるのは、その草稿を前に広げ、言葉と詩の始原と神秘について共に語ろうと待ち構えている「ルコント・ド・リイルのような貴族の風格」を備えた幻影の人の長い顔である。

本訳については、原著者の校閲をいただいたものの、至らな

い点があるいはまだ残っているのではないかと思う。ご叱声をお願いするとともに、原文は“Philologie d'Orient et d'Occident”で容易に検索可能であるのでフランス語になじみのある方はぜひ参照をお願いしたい。

（原著者あとがき）

この『「幻影の人」西脇順三郎のギリシア語漢語比較』は、二月からはじめた仏文ブログ「東西文献学 Philologie d'Orient et d'Occident」に、47号から66号に連載したものの翻訳である。西脇順三郎が明治学院に残した「漢語とギリシャ語比較」の原稿は八千枚を越える。そのうちの大半はすでに、コピー、あるいは、元原稿のまま製本され、明治学院大学言語文化研究所に保存されている。

西脇順三郎は一九三三年、「Ambarvalia」の三行の短詩「天気」で一躍有名になった。

（覆された宝石）のやうな朝
何人か戸口にて誰かとささやく
それは神の生誕の日

三行目の「神の生誕の日」、ラテン語では dies natalis. これは私にとって、キリスト誕生の日、としか理解できなかった。詩人自身、また他の評者の、「神はキリストではない」という解説を聞いても私にはこれ以外のものは思い浮かばない。フランス語で書いた理由の一つは、こうした日本の常識のしばりを免れたいという気持もあった。西脇順三郎全詩の「引喩集成」を作成された新倉俊一教授は「（西脇の詩については）読者はモラルや意味を探求しないで、ただ絵を見るようにイメージの色彩と構図を楽しめばいい」と言われた。

明治学院大学文学部の専任になったのは一九七二年。まだ安保闘争、及び学園紛争の余韻があり学内は騒然としていた。しばらくして言語文化研究所長であった英文科の都留信夫教授が、白い綿の袋に入れた西脇先生の「漢語とギリシャ語比較」の原稿の一部を仏文の私の研究室に持って来られた。私が言語学を専門にしていたからだろう。この研究室でなら原稿に害が加えられないと先生が考えられたのか。原稿は三十年ほど研究室に平和に眠った。当時私は、この比較方法論にまったく興味がなく、この「漢語とギリシャ語の比較」は老学者の戯れと考えていた。

しかし原稿のことは常に私の頭にあった。西脇順三郎没後一九八三年に立ち上がったホメーロス輪読会に参加したのは、この原稿のギリシャ語が頭にあったからにほかならない。輪読会の主宰者満田郁夫教授も同じ想いだったらしい。ホメーロスの輪読会は二十七年続き、昨年度ようやく「イーリアス」「オ

デュッセイア」を全巻読み終えた。西脇教授が慶応の定年になる歳（六八歳）に私がなり、研究室を引き渡す時、原稿をデジタル化して残すことをようやく思いたった。今年の七月に言語文化研究所の生田康夫ギリシャ語講師にお手伝い戴き、千三百枚の撮影が三日がかりで行われた。

漢語とギリシャ語比較研究をポジティブにみる学者はいない。しかしこの原稿こそ、西脇詩学の真骨頂ではないかと私は思いはじめている。いまこうして改めて、自分の言葉ではない言葉で翻訳された訳文をみて思うことは、こうした内容を日本語では自分は書かなかっただろうということである。私の後天的な日本語では、きっと鎧兜をつけたような文体になり、それにつれて内容も違ったものになっただろう。フランス語の方は読む人のことを思うと、自分の思いを素直に出すことができる。日本語もフランス語同様、私にとっては外国語である。翻訳とはこういう意味で原文とは異なった別の作品である。

日本語に直すことにためらいがあったこの文章の翻訳を、生田康夫氏が引き受けて下さった。仏文出身の生田氏は、ホメーロス作品を二つとも原文で読み、「イーリアス」については、毎年読み返しておられる。さらにプルーストの「失われた時を求めて」を仏文で読破され、いくつか感想も書いておられる。こうした方は日本人としては極めて珍しい。彼はまた俳人としても活躍されている。拙い仏文を美しい日本語に翻訳していただけたのは光栄である。

（２０１０年12月１日）